

紀州みかんの周年出荷

三重県御浜町のみかん作り

三重県農業技術センター
紀南かんきつセンター場長

大 畑 繁

1. はじめに

我が国におけるかんきつ類の品種構成の現状は、温州みかんが全体の80%以上を占めている。そうした性格上、販売期間が集中的に秋冬期にしぼられ、一定の定期的な供給過剰を来し、価格の不安定による生産安定を阻害している。更に消費の動向は多様化、高級化へと移行の傾向が見られ、嗜好もかなり変化してきていることなどを考えると、現状のかんきつ類の品種構成では、将来の在り方に多大の支障をきたすことが考えられる。しかし我が国内で、温州みかん以外の越年果実の生産に必要な年間平均気温16.5°C以上、最低気温-5°C以上といわれる地帯は鹿児島、宮崎、熊本、高知、愛媛の西南団地の海岸線の一部と、本県南部地方に限定され、自然環境の中で周年的なかんきつ類の栽培可能地は少ない。

本県熊野灘沿岸地帯は、それらの中で最も自然条件に恵まれ、全国産地のトップを切って、9月上旬より青切りみかんが生産出荷され、各主産県の出回る10月下旬には早くも販売が終了し、価格も常にkg当たり120円を上回っている。続いて川野甘夏を主体とする雑柑類の果実を、自然条件の中で越年し、1月中旬頃より川野甘夏が早くも市場出荷され、温州みかんが暴落をきたした昭和47年度においても平均価格123円と、温州みかんの約2倍以上の価格で取引されている。

三重県南牟婁郡御浜町は、中晩性かんきつを作目とする御浜地区国営農地開発事業（昭和50年着工56年完成予定、開園面積530ha）などと相まって、そうした全国的にも最も有利な条件を生かし、栽培されている川野甘夏、田の浦オレンジやその他特産雑柑類に加え、果樹試験場興津支場ならびに、当センターで育成された数種の新品種を加えた周年出荷体系の品種構成により、他産地の販売期と競合しない販売体制による、かんきつ類の周年栽培産地の確立に取り組んでいるみかんの町である。

2. 御浜町みかん産地のあゆみ

当町のみかん栽培歴史は古文書によると、約200年前の宝暦6年、当地方に野生のみかんが随所に見られ、新宮藩主が栽培を奨励したことが記されている。江戸末期

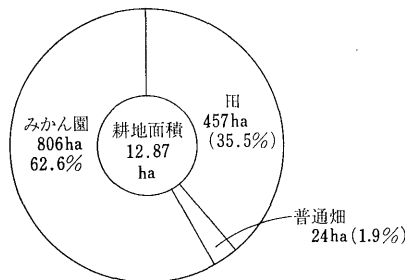
には本みかん、改良紀州みかん、八代みかんなどを和歌山、田辺方面から導入し、農家では各家庭に2本、3本と植えられたようである。しかし栽培が本格的に行われるようになったのは明治35年頃からで、それは養蚕がすたれて、桑園がみかん園に植えかえられたからである。

大正初期の生産高は40t程度であったが、生産技術が向上した昭和10年頃には、温州みかん800t、夏柑1,600tにまで伸び、名古屋から遠くは北海道まで販路が拡げられ、本場紀州みかんとしての名声を博したが、今次の戦争による食糧難により柑きつ伐採令まで出るに至り、一部みかんを伐採して芋作りなどの苦難時代が続いた。

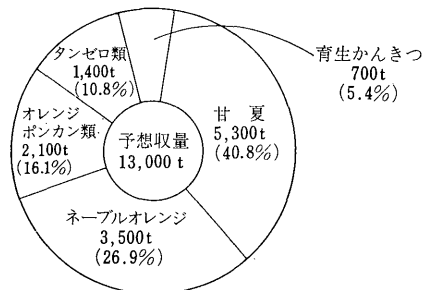
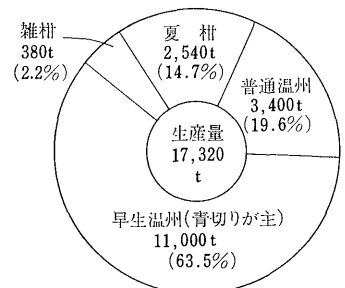
戦後、篤農家や青壮年によって各地に研究同志会が結成され、増産と品質改善に涙ぐましい活動がつけられ、特に昭和35年頃より、水田のみかん園転換と林地の開園による新植が増え、昭和37年から第1次構造改善事業、団体営開拓パイロット事業などの実施によって、農道の整備や、園地造成、共同防除施設、選果場の建設等近代化施設の完備と相まって、現在800ha余りに及ぶ栽培面積となっている。更に昭和50年度から国営農地開発事業により、恵まれた立地条件を活かし、晩柑類を対象として530haの大規模開園を行い、一大産地形成を図り「年中みかんのとれる町」の実現に、努力を傾注している。

3. 御浜町のかんきつ類の現状と目標

イ) 耕地の構成



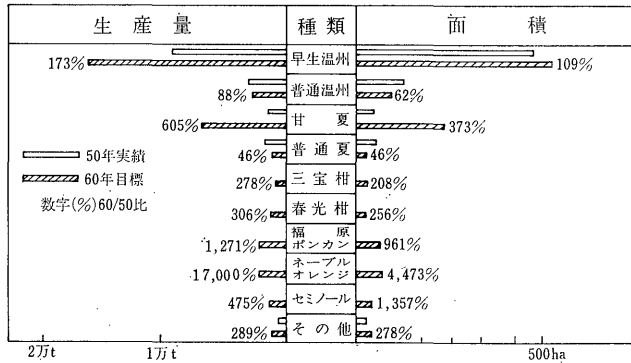
ロ) かんきつ種類別生産量



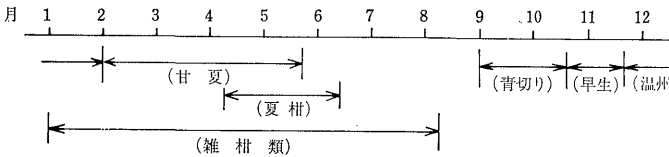
ハ) 国営開発完成園の
品種別収穫予想 (昭和60年)

(国営開発) 昭和56年を目標に地区内750haの山林原野を開畑し、530haのかんきつ園を造成するもので、参加農家は400戸の予定である。これは温暖な気候ならびに土壌の適性を生かして、晩生かんきつ類を導入し、「年中みかんのとれる町」として、早生温州の青切りみかんの9月出荷から、翌年8月まで、ほぼ周年供給体制を確立しようとするもので、昭和50年より着工し、現在約30haに植栽を終り着実に事業は進行中である。

二) 御浜町のかんきつ種類別生産現状と目標 (昭和60年目標)



ホ) かんきつの収穫時期と販売



4. 当町における販売時期別品種構成

出荷時期	品種名	出荷時期	品種名
1月	川野甘夏、温州みかん	7月	育成種、バレンシヤー、日向夏
2	川野甘夏、田ノ浦オレンジ	8	育成種
3	川野甘夏、田ノ浦、八朔、三宝柑、春光柑	9	青切りみかん
4	川野、田ノ浦、八朔、三宝柑、春光柑、福原オレンジ	10	青切りみかん
5	川野、田ノ浦、福原オレンジ、セミノーブル	11	着色早生温州、温州みかん
6	夏柑、バレンシヤー、セミノーブル、日向夏	12	温州みかん

5. 当町で栽培されている周年供給みかんの食期別にみた品種の解説

周年供給採用品種についてののみ、ごく解りやすく取りあげてみる。

○宮川、興津温州の青切りみかん……外観は青いが、味のりが早いので、全国トップクラスの9月上旬からの早出し出荷に有利な御浜町特産みかん。

○宮川、興津早生の着色みかん……5割着色で10月中旬からの出荷、味で好評のあるみかん。

○八朔……万延年間に発見され、ハッサク(8月1日)頃から食べられるのでこの名がついた。食期は1~4月。

○ネーブルオレンジ……主として早生系のものが主

体、熟期は12~2月、味では中晩生柑きつの王座である。

○小林みかん(市木オレンジ)……外観は夏柑、中味は温州みかんで、1~2月が食期のスプーンオレンジ。

○ポンカン……原産はインド、当町のような高温多雨地帯でないとの良品の生産は不可能。食期は2~3月。

○安政柑……安政年間に実生で生じたのでこの名がある。酸味少く香気と爽快な風味がある。2~3月が食期。

○晩白柚……マレイ生れでブタンのの中では最もジャンボなもので、2kgにもなる。食期は1~3月。

○甘夏(川野、田ノ浦)……温州みかんの販売終期の3~5月が食期で、初夏における季節みかんの王者。町内における主力品種。

○春光柑……当地が原産で、詩人佐藤春夫氏の命名による高貴な香りの3月、4月みかん。

○三宝柑……紀州原産で味もよいが、稀少価値の高い4月みかん。

○セミノーブル……三重県志摩の桂清吉氏育成のもの、鹿児島県試、静岡柑試が導入したものである。3月収穫で5~6月が食期。

○福原オレンジ……味はネーブルオレンジに似ているが、食期はぐんと遅く、5月、6月用の高級オレンジ。

○バレンシヤー……原産は英国で、我が国では当地方のような高温地帯が適地である。6~7月が食期。

○日向夏……我が国雑柑中最も晩熟のもので、ナイフで果皮をむき、綿質部は果肉につけたままで食す。6~7月が食期。

○興津2070……八朔と夏柑の交配種で、果皮は八朔に似ている。食期は7~9月で、味はさわやかで果汁が多く、中の袋がむきやすいのが特徴。

以上とりとめのない文筆で申し訳ないが、みかんの周年栽培という与えられたテーマで、三重県南牟婁郡御浜町の年中みかんの出来る町を紹介させていただいた。

あとがき いよいよ本格的な暑さがやってきました。皆様さぞご多忙のことと存じます。最近では、と角、編集手順がうまく行かず執筆の先生方、読者各位にご迷惑をおかけしております。なお9月号は、静岡県茶業試の向笠先生の「茶園土壌の理化学性」、鹿児島県茶業試の鳥山先生の「良質、多収茶の栽培と緩効性肥料」、長野県総合農試高野利康先生の「果菜類の保鮮流通(栽培)試験の概要」その他でかざる予定です。(K生)

(訂正) 7月号7頁所載、愛知県農業総合試験場棚田先生の「農業経営の複合化」の副題「~その具的な方策について~」は「~その具的な方策について~」の誤りです。慎んで訂正致します。